

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：17102

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2019

課題番号：16KK0029

研究課題名（和文）トルコ共和国建国期の国民統合における宗教と世俗（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Islamic Factors in the Nation Building of the Republic of Turkey(Fostering Joint International Research)

研究代表者

小笠原 弘幸 (OGASAWARA, Hiroyuki)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：40542626

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,900,000円

渡航期間： 9ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は、トルコ共和国が建国されて以降の国民形成の過程において、宗教と世俗化の緊張関係とネゴシエーションのありかたを明らかにするものであった。本研究の結果、これまで世俗化の側面が強調されてきたトルコ共和国の国民形成にあって、イスラム教に基づく価値観が無視しえない存在感を持って、国民形成の手段のなかに入り込んでいたことが明らかになった。ただし、その範囲は文化面に限られており、政治面へのイスラム的要素の表出はのちの時代を待たねばならない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、トルコ共和国の国民形成について、イスラム教がどのような役割を果たしたのかに着目した点にある。これまでのトルコ共和国研究では、世俗化に焦点が当てられてきた。しかし、オスマン帝国を否定して成立したはずのトルコ共和国において、イスラム教的な価値観が国民形成に一定の役割を果たしていたことは、今後の研究において重要な提言となりうる。また、本研究の研究成果は、親イスラム教・親オスマン帝國的な価値観が存在感を持ちつつある現在のトルコを理解する際にも有用であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the tensions and negotiations between religion and secularization in the process of nation building since the founding of the Republic of Turkey. The results of this study reveal that in the formation of the Turkish nation, where the secularization aspect has been emphasized in the previous studies, the values based on Islam have entered into the means of the nation building with a presence that cannot be ignored. However, its influence is limited to the cultural aspect, and the representation of Islamic factors in the political aspect will have to wait for a later period.

研究分野：トルコ共和国史

キーワード：イスラム教 世俗化 アタテュルク トルコ共和国 オスマン帝国 歴史認識 国民統合

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者の基課題「戦間期トルコ共和国における国民意識の内面化」は、中東でただ一つ安定した国民国家体制を構築しえた、しかし現在その体制が大きく動揺しているトルコ共和国において、民族主義と世俗主義を核とするアイデンティティがどう形成されたかを検討するものであった。とくに注目するのは、共和国建国期における教育とメディアを通じた国民意識の内面化である。この分析を通して国民統合の「強固さ」と「脆弱さ」を明らかとし、オスマン帝国時代からトルコ共和国建国を経て、現在にまでつながる視座を提示することを目的とした。方法論としては、一次史料に基づいた実証的歴史学的手法を基本とした。

本国際共同研究では、昨今のトルコ政治体制の急速な転換を踏まえて基課題のテーマの一部を発展させ、トルコ共和国の形成期(1923~1945年)における「国民の宗教意識と世俗化政策のあいだの緊張関係、そしてその政治・社会への影響」を論ずることとした。トルコにおける宗教と世俗のあいだの緊張関係は、すなわち今日のトルコの政治(親イスラム系与党)と軍事(世俗派軍人層)の対立と読み替えることができる。2016年7月15日のクーデター未遂は、この表出のひとつであったと考えられうる。クーデター未遂とそれに続くエルドアン政権の強権的政策によって、建国以来のトルコ共和国の国家体制は、いま大きな変容を迫られている。本国際共同研究の研究テーマは、このようにトルコで進展している現在進行形の問題と深くかかわっており、その意味で喫緊の課題だといえる。

## 2. 研究の目的

研究代表者の基課題は、トルコ共和国において民族主義と世俗主義にもとづくアイデンティティの形成を、教育とメディアによる国民意識の内面化のメカニズムに着目して明らかとするものであった。それをうけて本国際共同研究では、トルコ共和国の建国期における、国民の宗教意識と世俗化政策のあいだの緊張関係、およびその政治・社会への影響を、可能な限り明らかにすることを目指した。本研究テーマは、トルコで進展している現在の問題と関連しているが、トルコの現状を短期的な視点から解釈するのではなく、あくまで歴史的な視座から、実証的に進展させることを重視した。オスマン帝国末期・トルコ共和国初期につくられたトルコ国家体制がどのようなものであったのかを、世俗意識とイスラム教の問題に焦点を当て、歴史史料に基づいて明らかにすることが、本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

トルコ共和国は、その建国以来、民族主義と世俗主義をそのナショナル・アイデンティティの基礎に据えてきた。しかし共和国建国期についての客観的・学問的な研究は、建国の父アタテュルクへの批判を避けるという傾向から、避けられる傾向にあった。この動向が変化したのは、アタテュルクに批判的なイスラム政権が与党になった2000年代からである。以降、徐々にアタテュルクの役割や建国期の再評価が進められており、研究代表者の研究はこうした潮流に掉さすものである。

こうして共和国史研究の新たな潮流が世界的な動向であるものの、我が国の研究機関におい

では、文書史料はもちろん、刊行された史料についても蓄積に乏しく、適切な研究を遂行するのが難しいのが現状である。また研究者の層についても厚いとは言えず、この分野で国際的な成果を上げるには、海外研究者との共同研究が必要といえる。

本研究は、実証的歴史学の手法にひとつの軸足を置く。公文書や定期刊行物などの文字史料に基づいた堅実な実証主義こそが、一過性のものではない確固たる成果を提供すると考えるためである。同時に、政治学や法学などのさまざまなディシプリンを持つ研究者の協力を得つつ遂行される。政治・社会が複雑化した20世紀をあつかう歴史研究は、多様な方法論を総合的に取り入れる必要があるゆえである。

中東工科大学の所在地であるアンカラには、トルコ共和国公文書館、トルコ歴史協会図書館、国民図書館あるいは大国民議会図書館などの図書館・公文書館が集中している。また、アンカラはイスタンブールと並んで、トルコにおける情報発信の中心の一つであることから、書籍・雑誌・シンポジウムなどの形で発信される最新の研究成果を迅速に入手し、研究に取り入れることが可能である。研究協力者であるオメル・トゥラン教授の協力のもと、こうした史資料を利用し、研究を遂行してゆく。

#### 4. 研究成果

本研究課題の研究成果を、主として発表年順に説明する。まず、Hiroyuki Ogasawara. “The Quest for the Biblical Ancestors: the Legitimacy and Identity of the Ottoman Dynasty in the Fifteenth-sixteenth Centuries.” *Turcica*, 48(2017): 37-63 および Hiroyuki Ogasawara. “Enter the Mongols: A Study of the Ottoman Historiography in the 15th and 16th Centuries.” *Osmanlı Araştırmaları* 51(2018): 1-28 は、本研究の前提となる、オスマン帝国時代のアイデンティティについて論じたものである。トルコ共和国におけるアイデンティティにおいても重要な、旧約聖書・イスラム的起源意識と、遊牧民的心性の変容を、それぞれ扱っている。同様に、オスマン帝国時代を取り扱った学会発表二編(Hiroyuki Ogasawara, “Making the Genealogical Tree of the Ottoman Dynasty in the 15th-16th Centuries,” 14th International Congress of Ottoman Social and Economic History, Sofia University, 27 July 2017 および Hiroyuki Ogasawara, “Narrating Disobedience to the Seljuk Dynasty in the Ottoman Sources.” 21st Annual Mediterranean Studies Association International Congress, June 1, 2018, Sant’Anna Institute (Sorrento)) を行い、前者は系譜意識の形成、後者は先行王朝たるルーム・セルジューク朝との言説上の関係を取り扱った。

「書評と紹介: Gavin D. Brockett, *How Happy to Call Oneself a Turk: Provincial Newspapers and the Negotiation of a Muslim National Identity*」『イスラム世界』87(2017.6), 33-39 は、一党独裁性が崩れた1950年代を中心とした研究のレビューである。言論統制が崩れたこの時代、イスラム的な価値観への憧憬が一斉に語られた。プロケットは、このときにトルコの真の国民形成がなされたと位置付けた。本研究課題が対象とする直後の時代を取り扱っているため、有用な示唆を得ることができた。

研究代表者が編者を務めた『トルコ共和国 国民の創成とその変容 アタテュルクとエルドアンのはざままで』九州大学出版会、2019年は、トルコ共和国の建国期から現在まで、国民形成に焦点を当てた10篇の論考を含んだ論文集である。基課題の最大の研究成果であると同時に、本研究課題の成果の一部をなす。研究代表者は、総論である「序章」および歴史認識におけるアイデンティティの変容に焦点を当てた「第一章 国民史の創生」を担当した。

中東工科大学での在外研究中の成果としては、アテネで開催された国際学会における研究報告、Hiroyuki Ogasawara, “Creating New Muslim History: Turkish Experience in the Early 20th century,” 17th Annual International Conference on History & Archaeology: From Ancient to Modern, 2 June 2019, Titania Hotel (Athens)があげられる。

また、本研究課題研究機関の終盤では、現在のトルコ共和国史研究をリードするユタ大学のハカン・ヤヴズ教授が主催する War & Independence: Trauma, Memory, and Modernity in the Young Turkish Republic (1908-1950), 24 January 2020, The University of Uta (Salt Lake City)において、報告Hiroyuki Ogasawara, “Development of the Turkish Historical Thesis during the Early Period of the Republic of Turkey”を行った。

以上の国内外の研究成果により、本プロジェクトは一定のインパクトを持ちえたと考える。とくに『トルコ共和国 国民の創成とその変容』はふたつの学術誌で書評され、またユタ大学で行った報告は、英語論文としてリライトし投稿済みであり、2021年刊行予定の論集に掲載される予定である。

本研究の今後の展開として、本研究が取り上げた宗教と世俗にまつわる政策を、当時の共和人民党政権が強権的に運営することを可能にした権威主義的体制の検討が進められる必要がある。トルコ共和国の権威主義的性格は、建国期のアタテュルク時代から、現在の公正発展党政権にまで一貫して続くものである。いうなれば、宗教派と世俗派どちらにも通底している要素であり、この検討が、現在のトルコ共和国研究に必要とされていると考えられる。今後は、本研究課題を展開させる形で、トルコ共和国における権威主義の形成と発展について研究していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Hiroyuki Ogasawara	4. 巻 51
2. 論文標題 Enter the Mongols: A Study of the Ottoman Historiography in the 15th and 16th Centuries	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Osmanli Arastirmalari	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小笠原弘幸	4. 巻 87
2. 論文標題 書評と紹介：Gavin D. Brockett, How Happy to Call Oneself a Turk : Provincial Newspapers and the Negotiation of a Muslim National Identity	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 イスラム世界	6. 最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroyuki Ogasawara	4. 巻 48
2. 論文標題 The Quest for the Biblical Ancestors: the Legitimacy and Identity of the Ottoman Dynasty in the Fifteenth-sixteenth Centuries	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Turcica	6. 最初と最後の頁 37-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Hiroyuki Ogasawara
2. 発表標題 Narrating Disobedience to the Seljuk Dynasty in the Ottoman Sources
3. 学会等名 21st Annual Mediterranean Studies Association International Congress（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroyuki Ogasawara
2. 発表標題 Making the Genealogical Tree of the Ottoman Dynasty in the 15th-16th Centuries
3. 学会等名 14th International Congress of Ottoman Social and Economic History (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroyuki Ogasawara
2. 発表標題 Development of the Turkish Historical Thesis during the Early Period of the Republic of Turkey
3. 学会等名 War & Independence: Trauma, Memory, and Modernity in the Young Turkish Republic (1908-1950) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hiroyuki Ogasawara
2. 発表標題 Creating New Muslim History: Turkish Experience in the Early 20th century
3. 学会等名 17th Annual International Conference on History & Archaeology: From Ancient to Modern (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小笠原弘幸	4. 発行年 2019年
2. 出版社 九州大学出版会	5. 総ページ数 296
3. 書名 トルコ共和国 国民の創成とその変容 アタテュルクとエルドアンのはざままで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	オメル トゥラン  (Omer Turan)	中東工科大学・歴史学科・教授	